

看護系大学生のロールモデルに関する研究

— ロールモデル選択への自己への焦点化の影響 —

鍋田智広¹・水田真由美²#・山田和子²#・松田憲幸³#

(¹北陸先端科学技術大学院大学・²和歌山県立医科大学・³和歌山大学)

大学教育においては、学生に自己形成を支援し、社会とのつながりを持てるように推進することが重要である。このような自己形成を促す取り組みとして看護系大学においては、学生にロールモデルの形成を促すことが重要視されている。ロールモデルとは、その態度や行動に共感し、模倣、同一化、役割学習を試みようとする人物やその行動とされる。ロールモデルは、実践において規範となる役割モデルであり、学生が看護師として実践する際の行動の基準となる。本研究では、学生に職場での自己管理を看護師のロールモデルとして形成させるための支援を検討することを目的とし、自己の行動を意識すること(自己焦点化すること)の効果を調べた。

方法

参加者 看護系大学に所属する大学生2年生79名(平均19.77歳)と4年生87名(平均21.74歳)の合計166名であった。学年ごとに参加者は無作為に自己焦点化群と他者焦点化群とに分けられた。自己焦点化群は2年生39名、4年生43名、他者焦点化群は2年生40名、4年生44名であった。

手続き 授業実施後に参加者は調査用紙に回答した。回答時間はおよそ10分程度であった。調査用紙は、1. 過去の大学での生活態度について評価するための質問項目と、2. ロールモデルを選択するための質問項目を含んでいた。1の過去の生活態度の評価の質問については、自己焦点化群の参加者の調査用紙には、自分の生活態度について評価するように質問文が記載された。他者焦点化群の参加者の調査用紙には、友人の生活態度について評価する質問文が記載されていた。すべての参加者は8個の質問項目について生活態度が当てはまるかどうかを5点評定で判断した。2のロールモデルの質問では、将来看護師になったときに目標とする看護師の行動特性を尋ねた。ここでは、10項目の行動記述文について、どの程度目標とする看護師が備えている行動特性に当てはまるかを5点評定で評価した。最後に10項目から最も重要だと考える行動特性を2項目選ばせ、各々について選んだ理由を記述させた。

結果

参加者ごとに重要なロールモデルとして選ばれた2項目を、自己焦点化群と他者焦点化群ごとに集計した。また、ロールモデルの項目のうち、「仕事と生活にメリハリをつけられる」「仕事以外の時間を有意義に過ごせる」の2項目を自己管理項目とし、それ以外の8項目と分けた。表1に各群の自己管理項目とその他の項目の項目数を示す。カイ二乗検定を行った結果有意差が認められた($\chi^2(1) = 14.56, p < .01$)。加えて、自己焦点化群の参加者においては、自己管理とその他の項目の違いが有意であったが、他者焦点化群の参加者においては有意ではなかった($\chi^2s = 13.77, .79, dfs = 1, ps < .01, n.s.$)。

表1 自己焦点化群と他者焦点化群において自己管理項目とその他の項目が重要なロールモデルとして選択された数

	自己管理	その他
自己焦点化群	50	107
他者焦点化群	38	129

註) 各参加者は2項目を選択したので統計的には自己焦点化群と他者焦点化群のそれぞれの総数は164と168であるが、自己焦点化と他者焦点化は欠損値が7と1であり、これらを引いた157と167が各群の総数となる。

考察

看護師のように、緊張感やストレスの高い職場においては自己管理が重要であり、学生時から自己管理をロールモデルとして形成するように支援を提供することは看護系大学において重要である。本研究は、自己の行動に注意を向けることが、自己管理をロールモデルとして形成することに重要であることを示した。また、ロールモデルを選択させる研究は数多くあるものの、自己への焦点化の効果を調べた研究はない。これは、ロールモデルの選択時には、自己に焦点化するのが自明だと捉えられてきたためと考えられる。すなわち、本研究の結果は、自己焦点化がロールモデル選択において自明ではないことを示唆し、自己焦点化を支援することの重要性を明らかにしたと言える。

本研究は科学研究費補助金 平成24年挑戦的萌芽研究の助成を受けた (研究代表者: 水田真由美 課題番号 24659962)